

『コリントの信徒のみなさんへ 第二』私訳(Ⅰ)

阿 部 包

『コリントの信徒のみなさんへ 第一』私訳の完結を受けて、いよいよ『コリントの信徒のみなさんへ 第二』私訳(Ⅰ)を掲載する。コリントの状況については、『コリントの信徒のみなさんへ 第一』私訳(Ⅰ)に付した簡単な解説を参照願うとして、ここでは、2コリントと通称されるわれわれの手紙そのものに関わる問題について、やはり簡単に触れておきたい。執筆時期は54～55年頃と推定されるが、全体が一度に書かれたものではなく、別々の機会に書かれた手紙がまとめられて現在の形になったと言われている。それは、内容的に統一性が欠如していたり、冷静なパウロがいるかと思えば感情の高ぶりを抑えきれないパウロがいたりするからであり、また、エルサレム教会に対する献金集めを呼びかけるまとまった部分(8～9章)が確認される¹からでもある。

特に、従来「涙の手紙」、「涙の書簡」と呼び習わされてきた10～13章はよく知られているだろう。

今日、岩波書店版のように、翻訳者が「説得的」と判断する仮説に基づいて、現在の手紙のまとまりを解体し、新たな区分に従って順番を入れ替える試みも行なわれている²が、われわれは現在のまとまりを尊重

¹ 例えば、この部分だけを注解の対象とする例もある。Betz, Hans Dieter. *2 Corinthians 8 and 9: A Commentary on Two Administrative Letters of the Apostle Paul*. Hermeneia. Fortress, 1985.

² 岩波書店版におけるパウロの手紙の担当者は青野太潮である。青野はG・ボルンカムの仮説に従って、手紙の区分をA(使徒職についての弁明の書簡)2:14～7:4(6:14～7:1を除く)、B(涙の書簡)10章-13章、C(和解の書簡)1:1～2:13+7:5～13、D(献金の勧めの書簡)8章、E(献金の勧めの書簡)9章、としている。

した。なお、『コリントの信徒のみなさんへ 第二』は、二回に分けて掲載する予定であるが、今回はそのうちの1～7章である。翻訳に際して心がけた原則は従来の「私訳」のとおり、ギリシア語原文³と対照しながら読んで分かりやすいこと、また、日本語としても自然な論理展開を追うことができること⁴、である。訳注はページ毎の脚注形式で付すが、必要最小限にとどめる。

翻訳に当たって参照した文献一覧については、次回にまとめて示すことにするが、予め一点だけ記しておきたいのは、田川健三の手になる労作⁵についてである。ページ数だけをとっても、注は本文1に対して8という分量である。もちろん、訳出に際しての基本姿勢の相違や解釈の相違は当然あるが、注の質と量という点で必読文献の地位は今後長く続くものと思う。

³ 底本は、従来どおり、NESTLE-ALAND, *NOVUM TESTAMENTUM GRAECE*, Ed. XXVII, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1993である。なお、2012年に、改訂28版が発行されている。

⁴ ギリシア語原文の文章の流れや論理展開も重視し、可能な限り文章の順番も生かして訳出するよう努めた点は従来どおりである。パウロの手紙は、彼と共に働く者たちの手で名宛教会に運ばれ、そこで信徒たちを前に朗読された。それを聴いた信徒たちは、あたかもパウロ自身が目の前にいて語り聞かせているかのように受け止めたようである。そのような状況を考えると、朗読者の口から紡ぎ出される言葉の順番は可能な限り尊重されるのが筋というものであろう。

⁵ 田川健三 訳著『新約聖書 訳と注3 パウロ書簡 その一』、作品社、2007年。なお、『新約聖書 訳と注』は全6巻で、既刊は第1巻（マタイ福音書／マルコ福音書）、第2巻上（ルカ福音書）、第2巻下（使徒行伝）、第3巻（パウロ書簡 その一）、第4巻（パウロ書簡 その二／擬似パウロ書簡）である。

コリントの信徒のみなさんへ 第二

〈挨拶〉

1

1 神の意志⁶によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロ、そして兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア⁷ 全土にいるすべての聖なる者たちへ⁸。2 わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和があなたがたに⁹ あるように。

〈苦難と感謝〉

3 褒むべきかな¹⁰、神にしてわたしたちの主イエス・キリストの父¹¹、慈しみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神¹² は。4 神は、どんな苦難のときにもわたしたちを慰めてくださるので、わたしたち自身が神から慰めていただいたその慰めによって、わたしたちもまた、どんな苦難のなかに

⁶ 「神の意志によって」と訳したのは、*διὰ θελήματος θεοῦ*。直訳である。*θέλημα θεοῦ* の訳は、「神の御心」（新共同訳）、「神の御意志」（フランシスコ会）、「神の御旨」（田川訳）。

⁷ 原文には、特に「州」はない。しかし、「州」を補って訳す場合が目立つ。「州」という行政区分が適当かどうか判断しにくい場合も少なくないので、拙訳では、補っていない。

⁸ ローマ 1:7。

⁹ 2 節=ローマ 1:7, 1 コリント 1:3。

¹⁰ 「褒むべきかな」と訳したのは、*Εὐλογητός*。文頭の単語なので、翻訳でもできれば文頭に出したい。そのためには、若干時代が勝った感じは否めないが、この訳語がよい。田川訳に同じ。「賛美すべきかな」（塚本訳）。

¹¹ 「神にしてわたしたちの主イエス・キリストの父」と訳したのは、*ὁ θεὸς καὶ πατὴρ τοῦ κυρίου ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ*。別訳「わたしたちの主イエス・キリストの父である神」（新共同訳）。

¹² 「あらゆる慰めに満ちた神」と訳したのは、*θεὸς πάσης παρακλήσεως*。 *παρακλήσις* < *παρακαλέω* 「呼びかける」。従って、本義はあくまでも「呼びかけ」。しばしば用いられる「慰め、励まし」という訳語がどこまで適切かどうかについては、実は慎重に判断して掛からなければならない。

ある人々をも慰めることができます。5なぜなら、キリストの苦しみがわたしたちに満ち溢れるのと同じように、キリストをとおしてわたしたちの慰めも満ち溢れるからです。6わたしたちが苦難に遭うとしても、それはあなたがたの慰めと救いのため、わたしたちが慰められるとしても、あなたがたの慰めのためなのです。この慰めが働いて、わたしたちも被ったのと同じ苦難をあなたがたは耐え忍ぶことができます¹³。7それで、あなたがたに対するわたしたちの希望は揺らぐことはありません。あなたがたが苦難に共に与っているように、慰めにも共に与っていることをわたしたちは知っているからです¹⁴。

8実際、兄弟たちよ、アジアで起こったわたしたちの苦難について、わたしたちはあなたがたに知らずにいてほしくありません。それは、わたしたちが為すすべもないほどひどく¹⁵ 圧迫されて、生きることに絶望してしまい、9わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、もはや自分自身に頼ることができず、死者を復活させてくださる神に頼るようになったのです。10神は、これほど恐ろしい死からわたしたちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょう。この神にわたしたちはずっと希望を置いているのです。[すなわち]これからも救ってくださるだろう、と。11あなたがたも祈りによってわたしたちのために協力してほしい。そうすれば¹⁶、多くの人々から、わたしたちの身に起こったこの恵みの出来事について、多くの祈りによって¹⁷、わたした

¹³ 「この慰めが働いて、わたしたちも被ったのと同じ苦難をあなたがたは耐え忍ぶことができます」と訳したのは、*τῆς ἐνεργουμένης ἐν ὑπομονῇ τῶν ἀντῶν παθημάτων ὧν καὶ ἡμεῖς πάσχομεν*。 *τῆς ἐνεργουμένης* は、直前の *τῆς ὑμῶν παρακλήσεως* を修飾する分詞。修飾句が延々と続くことと文末から訳上げることが避けるために、一旦区切った上「この慰め」を補って訳した。

¹⁴ 「…ことをわたしたちは知っているからです」と訳したのは、*εἰδότες ὅτι* …という *ὅτι*…節を伴う分詞。

¹⁵ 「為すすべもないほどひどく」と訳したのは、*καθ' ὑπερβολὴν ὑπερδύναμιν*。

¹⁶ 「そうすれば」と訳したのは、*ἴνα*。

¹⁷ 「多くの祈りによって」と意識したのは、*διὰ πολλῶν*。同じ文脈の中に *τῇ δεήσει*「祈りによって」が出る (*ἡ δεήσις*)。 *πολλῶν* の後に *δεήσεων* を補つ

ちのために感謝がささげられるでしょう。

〈コリント訪問の延期〉

12 実際、わたしたちの誇りは、わたしたちの良心の証しでもあるのですが、それは、わたしたちが神の単純さと純粋さによって、肉に属する知恵によってではなく神の恵みによって¹⁸、この世で振る舞ったし、とりわけあなたがたに対しては¹⁹ そうだったということです。13 わたしたちがあなたがたに書いていることは、あなたがたが現に読み、かつ理解していること以外にはありません²⁰。しかし、わたしはあなたがたが完全に理解してくれることを希望しています。14 あなたがたもわたしたちのことを部分的には理解したとおり、[わたしたちの]主イエスの日には、ちょうどあなたがたがわたしたちの誇りであるように、わたしたちもあなたがたの誇りであるということ。

15 このように確信して、わたしはまずあなたがたのところへ行こうと計画したのです。そうすれば、あなたがたは二度目の恵みをいただけるわけです。16 そして、あなたがたのところを通過してマケドニアに行き、再びマケドニアからあなたがたのところへ戻って来て、あなたがたによってユダヤに送り出してもらおうと計画したわけです²¹。17 ところで、

て読むとよい。ただし、田川が、391頁の当該注において *πολλῶν* を中性複数形と断定しているのは勇み足。*πολύς, πολή, πολύ* の複数属格形は男性・女性・中性いずれも同形 *πολλῶν* である。

¹⁸ 「肉に属する知恵によってではなく神の恵みによって」と訳したのは、*οὐκ ἐν σοφίᾳ σαρκικῇ ἀλλ' ἐν χάριτι θεοῦ. σαρκικός* 「肉に属する、肉的な」は「人間的な」の意味。

¹⁹ 「とりわけあなたがたに対しては」と訳したのは、*περισσοτέρως δὲ πρὸς ὑμᾶς*。

²⁰ 「私たちがあなたがたに書いていることは、あなたがたが現に読み、理解していること以外にはありません」と訳したのは、*οὐ γὰρ ἄλλα γράφομεν ὑμῖν ἀλλ' ἢ ἃ ἀναγινώσκετε ἢ καὶ ἐπιγινώσκετε*。「…以外にはありません」の別訳の可能性は、「…ことに他なりません」。

²¹ 15～16節の主動詞は、15節の *ἐβουλόμην* 「…と計画した」。それ以外の *ἐλθεῖν, διελθεῖν, ἐλθεῖν, προπεμφθῆναι* は不定詞。例外は、最初の *ἐλθεῖν* に続く *ἔνα* に導かれる句の動詞 *σχῆτε* のみ。そこで、最後に、主動詞 *ἐβουλόμην* を補った次第。

わたしがこのような計画を立てたのは、軽率な振舞いだったのだろうか²²。それとも、わたしが計画していることは肉に従って計画しているのであって、それで、わたしが「然り」と判断したものが然りとなり、「否」と判断したものが否となるということだろうか²³。18 しかし、神は真実な方であり、あなたがたに対するわたしたちの言葉が然りでも否でもあるなどということはありません。19 実際、神の子イエス・キリスト、あなたがたの間でわたしたち、すなわち、わたしとシルワノとテモテによって宣べ伝えられたイエス・キリスト²⁴ は、「然りにして否」となられたのではなく、この方において「然り」が実現したのです。20 実際、神の約束はことごとく、この方において「然り」となったのであり²⁵、それゆえ、同じくこのキリストをとおして²⁶、「アーメン」が神に対して可能となり、神に栄光を帰するためにわたしたちによって唱えられる²⁷ のです。

²² 「ところで、わたしがこのような計画を立てたのは、軽率な振舞いだったのだろうか」と訳したのは、*τοῦτο οὖν βουλόμενος μήτι ἄρα τῇ ἐλαφρίᾳ ἐχρησάμην;*。

²³ 「それで、わたしが『然り』と判断したことが然りとなり、『否』と判断したことが否となるということだろうか」と訳したのは、*ἵνα ἢ παρ' ἐμοὶ τὸ ναὶ ναὶ καὶ τὸ οὐ οὐ;*。この訳しにくい文章の解釈の可能性とその蓋然性については、田川、397~401 頁、当該注、参照。つまり、パウロが「然り」と言ったものだけが飽くまでも然りで、パウロが「否」と言ったものだけがやはり否なのだ、「然り」も「否」もパウロの判断次第という内容。

²⁴ 原文の語りの順番をできるだけ翻訳文に反映することを優先し、「イエス・キリスト」をここで補った。なお、「…によって宣べ伝えられた」と忠実に訳したが、日本語表現としては原文の受動相を能動相に替えて「…が宣べ伝えた」とする方がよいかもしれない（現行の新共同訳はそうしている）。

²⁵ 「この方において『然り』となったのであり」と訳したのは、*ἐν αὐτῷ τὸ ναί.* 原文には動詞が省略されている。

²⁶ 「同じくこのキリストをとおして」と意識したのは、*καὶ δι' αὐτοῦ*。

²⁷ 「『アーメン』が神に対して可能となり、神に栄光を帰するためにわたしたちによって唱えられる」と意識したのは、*τὸ ἀμὴν τῷ θεῷ πρὸς δόξαν δι' ἡμῶν*。直訳は、「『アーメン』、神に対して、栄光のために、わたしたちによる」。まあ、意識しないと伝わらない。どこまで意識するかが問題と言えば問題であり、どんな言葉を補うかも苦心するところ。見て分かるとおりに、「可能となり」は翻訳上の補い。さらに二度目の「神に」も文意を明瞭にするために繰り返すこととした。

21 わたしたちをあなたがたと共に堅く立ててキリストと一つにし²⁸、わたしたちに油を注いでくださったのは神で、22 その神はまた、わたしたちに証印を押して、わたしたちの心の内に霊という手付金を²⁹ 与えてくださいました。

23 わたしは、自分の命にかけて、神を証人として呼んで言いますが、わたしはあなたがたに遠慮して³⁰、あの後コリントに行かなかったのです。24 わたしたちは、あなたがたの信仰を支配しているなどということではなく、むしろ、あなたがたの喜びのために共に働く者です。実際、あなたがたは信仰にしっかり立っています³¹。

2

1 そこでわたしは、再び苦痛を携えて³² あなたがたのところに行くことはすまい、と決心したのです。2 実際、もしこのわたしがあなたがたを苦しめているなら、わたしによって苦しめられている人以外にだれが、わたしを喜ばせることができるだろうか。3 他ならぬこのことを³³ 書いたのは、わたしがそちらに行ったときに、わたしを喜ばせてくれるはずの人たちから苦痛を受けないためです。あなたがた全員について、わたしの喜びがあなたがた全員の喜びでもあると、確信しています³⁴。4 実

²⁸ 「わたしたちをあなたがたと共に堅く立ててキリストと一つにし」と訳したのは、*ὁ δὲ βεβαιῶν ἡμᾶς σὺν ὑμῖν εἰς Χριστόν*。

²⁹ 「霊という手付金を」と訳したのは、*τὸν ἀρραβῶνα τοῦ πνεύματος*。

³⁰ 「わたしはあなたがたに遠慮し」と訳したのは、*φειδόμενος ὑμῶν*。
φείδομαι 「惜しむ、差し控える、遠慮する、…をしないで置く、断念する」。「気兼ねする」も可能か。

³¹ 「実際、あなたがたは信仰にしっかり立っています」と訳したのは、*τῇ γὰρ πίστει ἐστήκατε*。「信仰を支えにしてしっかり立っている」はどうか。

³² 「苦痛を携えて」と訳したのは、*ἐν λύπῃ*。

³³ 「他ならぬこのことを」と訳したのは、*τοῦτο αὐτό*。ごく普通のギリシア語文の読みに従うと、直前でパウロが書いた内容を指すはず。「他ならぬ」は *αὐτό*。

³⁴ 「確信しています」と訳したのは、原文では *πεποίθως* の第 2 完了分詞 *πεποιθώς*。

際、わたしは大きな苦難と心の不安のために多くの涙を流しながら³⁵ あなたがたに書いたのです。それは、あなたがたを苦しめるためではなく、むしろ、あなたがたに対して溢れるばかりにわたしが抱いている愛を知ってもらうためでした。

〈違反者を赦す〉

5 しかし、もしもだれかが苦しめたとしても、それはわたしを苦しめたのではなく、むしろ部分的には、これは当人に重荷を負わせないために言うのだが³⁶、あなたがた全員を苦しめたのです。6 その人に対しては、大部分の人から受けたあの罰で十分です。7 だから、反対に、むしろあなたがたは赦し、慰め³⁷ てやりなさい。さもないと、その人はもっと

³⁵ 「大きな苦難と心の不安のために多くの涙を流しながら」と訳したのは、*ék* … *πολλῆς θλίψεως καὶ συνοχῆς καρδίας* … *διὰ πολλῶν δακρύων*。 *ék* は通常「…から」、*διὰ πολλῶν δακρύων* は、「涙ながらに」（フランシスコ会、新共同訳）、「多くの涙をもって」（青野訳、田川訳）などと訳されてきた。敢えて意識した。

³⁶ 「これは当人に重荷を負わせないために言うのだが」と訳した *ἵνα μὴ ἐπιβαρῶ* という挿入句は、翻訳上の問題がある箇所。直訳は、「わたしが重荷を負わせないために」。 *ἐπιβαρῶ* は他動詞で目的語（対格）を必要とするが、自明な場合は省略される。拙訳は、節の冒頭 *Εἰ δέ τις λελύπηκεν* 「しかし、もしだれかが苦しめたとしても」の主語 *τις* 「だれか」の対格 *τινὰ* が省略されているものと解した。次の6節の内容を考慮してもこう解するのが妥当と判断した。項目“*ἐπιβαρέω*”，『ギリシア語 新約聖書釈義辞典 II』教文館、1994年、52頁、参照。可能性は低いと訳者は判断しているが、別訳（従来訳）を上げておく。「いいすぎないためにこういうが」（バルバロ訳）、「大げさにならないようにこう言うのですが」（フランシスコ会訳）、「いい過ぎないようにすれば」（前田訳）、「大げさな表現は控えますが」（新共同訳）、「おおげさに聞こえるのを避けてこう言うのだが」（青野訳）、「言い過ぎないように言えば」（塚本訳）など。青野は、注で「直訳は『あまり〔あなたがたに〕私が圧力を与えないために〔そう言うのだが〕』』としている。つまり、従来は、動詞 *ἐπιβαρῶ* の目的語を、当該挿入句の直後に出てくる *πάντας ὑμᾶς* と解していたわけである。しかし、こう解さなければならぬ根拠は、文法上も文脈上もない。なお、この5節の原文と翻訳のあり方の問題については田川、406～409頁、当該注は、一般論としては傾聴に値する見解ではあるが、退けられる。

大きな苦痛に呑み込まれてしまいかねません。8そこで、わたしはあなたがたに勧めます³⁸、その人に愛を示す決定をするように³⁹。9実際、わたしが書いたのも、あなたがたがあらゆることについて従順であるかどうか、あなたがたの証拠を知るためでした⁴⁰。10あなたがたが何かについて赦す相手であれば、その人をわたしも赦します。すなわち、このわたしが赦したということは、もし何かについて赦したのなら、あなたがたのためにキリストの前で赦したことなのです⁴¹。11それは、サタンによってわたしたちが騙されないためです。実際、サタンが考え付くことは⁴²、わたしたちが知らずにいることはないのです。

〈パウロの不安と安心〉

12ところで、キリストの福音のためにトロアスに着いたとき、扉がわたしに対して主にあって開かれていたのですが、13わたしの兄弟テトスに会えなかったために、わたしは心が休まらず⁴³、人々に別れを告げて、

³⁷ 「慰めて」。別訳の可能性は「呼びかけて」、「声をかけて」。

³⁸ 別訳の可能性は「呼びかけます」。

³⁹ 「その人に愛を示す決定をするように」と訳したのは、*κυρώσαι εἰς αὐτόν ἀγάπην*。不定詞 *κυρώσαι* は、*παρακαλῶ* 「わたしは…勧めます」の内容を表す。*κυρώω* 「法的に有効にする、発効する、決定する」、1 aor. 不定詞。

⁴⁰ 「実際、わたしが書いたのも、あなたがたがあらゆることについて従順であるかどうか、あなたがたの証拠を知るためでした」と訳したのは、*εἰς τοῦτο γὰρ καὶ ἔγραψα, ἵνα γνῶ τὴν δοκιμὴν ὑμῶν, εἰ εἰς πάντα ὑπήκοοί ἐστε τοῦτο* は *ἵνα* で導かれる句の先取り。原文の順番を生かすために、*καὶ ἔγραψα* 「私が書いたのも」を先ず訳し、次に *ἵνα* で導かれる句を続けた上で、*εἰς τοῦτο* 「ためでした」で結んだ。

⁴¹ ギリシア語の文章は、動詞を繰り返さないのが普通なので、「あなたがたのためにキリストの前で赦したことなのです」と訳したのは、*δι' ὑμᾶς ἐν προσώπῳ Χριστοῦ* であるが、直前にある *κεχαρίσμαι* が言わば生きているわけである。

⁴² 「サタンが考え付くことは」と訳したのは、*αὐτοῦ τὰ νοήματα*。厳密に言えば、*οὐ … ἀγνοοῦμεν* の目的語なので、「サタンの考え付くことを」だが、日本語ではこういう場合は、しばしば「…は」と言う。なお、「彼」を日本語表現の慣例に従って固有名詞「サタン」に改めてある。

⁴³ 「わたしは心が休まらず」と訳したのは、*οὐκ ἐσχῆκα ἀνεῖναι τῷ πνεύματι μου*。

マケドニアに向けて出発しました。

14 しかし、神に感謝。神は、いつもキリストにあってわたしたちを凱旋行進に引き出し⁴⁴、また、キリストを知る知識の香りをわたしたちをとおして至るところで明らかにしておられます。15 なぜなら、救われる人々の間でも滅びる人々の間でも、わたしたちは神に対するキリストの芳しい香りだからです⁴⁵。16 滅びる人々にとっては、死から死へと導く香り、救われる人々にとっては、命から命へと導く香りなのです。しかし、このようなことにだれがふさわしいだろうか⁴⁶。17 実際、わたしたちは多くの者たちのように神の言葉を売り物にしてはおらず、むしろ、純粹さから語るように、むしろ、神から語るように⁴⁷、神の御前でキリストにあって語っています。

〈新しい契約に仕える者〉

3

1 わたしたちは、また自己推薦を始めているのだろうか。それとも、わたしたちは、ある者たちのように、あなたがたに宛てた推薦状があなたがたからの推薦状を必要とするのだろうか。2 わたしたちの推薦状は

⁴⁴ 「神は、いつもキリストにあってわたしたちを凱旋行進に引き出し」と訳したのは、*τῷ πάντοτε θριαμβεύοντι ἡμᾶς ἐν τῷ Χριστῷ*。τῷ は、この節冒頭の *Τῷ δὲ θεῷ χάρις* 「しかし、神に感謝」の「神」(与格)を受ける冠詞で同格になり、修飾句を導く。「凱旋行進に引き出し」と訳した *θριαμβεύοντι* は、*θριαμβεύω* の現在分詞、男性、単数与格。なお、この節の末尾の「明らかにしておられます」と訳したのも同じく現在分詞、男性、単数与格形 *φανερῶντι* (<*φανερῶ*)。

⁴⁵ 「なぜなら、…わたしたちは神に対するキリストの芳しい香りだからです」と訳したのは、*ὅτι Χριστοῦ εὐωδία ἐσμὲν τῷ θεῷ*。

⁴⁶ 「しかし、このようなことにだれがふさわしいだろうか」と訳したのは、*καὶ πρὸς ταῦτα τίς ἰκανός;*

⁴⁷ 「むしろ純粹さから語るように、むしろ神から語るように」と訳したのは、*ἀλλ' ὡς ἐξ εὐκρινείας, ἀλλ' ὡς ἐκ θεοῦ. ὡς ἐξ…, ὡς ἐκ…*はいずれも文末に現れる *λαλοῦμεν* にかかる副詞句(田川, 416頁, 当該注, 参照)。そこで、拙訳では、両方に「語る」を補って「…語るように」とした。

あなたがた自身です⁴⁸。それは、わたしたちの心の中に書きつけられていて、あらゆる人々に知られ、また読まれています。3 あなたがたについて明らかなのは、あなたがたがわたしたちの奉仕によって書かれたキリストの手紙⁴⁹であり、墨ではなく生ける神の霊によって、石の板にはなく肉の心の板に⁵⁰書きつけられた手紙だということです。

4 このような確信を、わたしたちはキリストのお蔭で神に対して持っています。5 わたしたちは、あたかも自力で何かを判断する能力が自分にあるというわけではありません⁵¹。むしろ、わたしたちの能力は神から来るのです⁵²。6 その神が、わたしたちに新しい契約に仕える者⁵³として

⁴⁸ 「わたしたちの推薦状はあなたがた自身です」と訳したのは、*ἡ ἐπιστολὴ ἡμῶν ὑμεῖς ἐστε*。「推薦状」と訳した *ἡ ἐπιστολὴ* は、前の1節に出ている *σοστατικῶν ἐπιστολῶν* の単数形であることは明らかなので、*ἡ ἐπιστολὴ* の後に *ἡ σοστατικὴ* が省かれている（または *ἡ* と *ἐπιστολὴ* の間に *σοστατικὴ* が挿入される）。なお、「自身」は原文のニュアンスを生かすための補い。

⁴⁹ 「わたしたちの奉仕によって書かれたキリストの手紙」と訳したのは、*ἐπιστολὴ Χριστοῦ διακονηθεῖσα ὑφ' ἡμῶν*。直訳は、「わたしたちによって奉仕されたキリストの手紙」、しかし内容的には、「わたしたちによって奉仕されて書かれたキリストの手紙」を意味する。ここから拙訳まではあと一步。「奉仕」の別訳の可能性は「務め」。

⁵⁰ 「肉の心の板に」と訳したのは、*ἐν πλαξίν καρδίαις σαρκίναις*。背景に、LXX エゼキエル 11 : 19b, 36 : 26b がある。順に、*ἐκσπάσω τὴν καρδίαν τὴν λιθίνην ἐκ τῆς σαρκὸς αὐτῶν καὶ δώσω αὐτοῖς καρδίαν σαρκίνην*、「わたしは彼らの肉から石の心を除き、肉の心を与える」、*ἀφελῶ τὴν καρδίαν τὴν λιθίνην ἐκ τῆς σαρκὸς ὑμῶν καὶ δώσω ὑμῖν καρδίαν σαρκίνην*、「わたしはお前たちの肉から石の心を取り除き、肉の心を与える」。「石」と対比される場合の「肉」は、言わば「血がかよった人間」、「生きた人間」を指す。

⁵¹ 「わたしたちは、あたかも自力で何かを判断する能力が自分にあるというわけではありません」と訳したのは、*οὐχ ὅτι ἀφ' ἑαυτῶν ἱκανοὶ ἐσμεν λογίσασθαι τι ὡς ἐξ ἑαυτῶν*。ここは、どの翻訳者も手こずっている箇所。こういう場合は、直訳してみるのが近道。

⁵² 「むしろ、わたしたちの能力は神から来るのです」と訳したのは、*ἀλλ' ἡ ἱκανότης ἡμῶν ἐκ τοῦ θεοῦ*。ほぼ直訳。「神から与えられたものです」（新共同訳）。

⁵³ 「新しい契約に仕える者」と訳したのは、*διακόνους καινῆς διαθήκης*。

の能力を与えてくださったのです。それは文字の契約ではなく、霊の契約ですが、実際、文字は殺すのに対して、霊は生かすのです。

7 ところで、もしも石に文字で刻み込まれた死に仕える務め⁵⁴でさえ栄光に包まれて、モーセの顔の消滅すべき栄光のゆえに⁵⁵、イスラエルの子らが彼の顔をまともに見ることもできないほどだった⁵⁶とすれば、8 まして、霊に仕える務めが栄光に包まれないなどということがどうしてあるのでしょうか。9 というのは、もしも有罪宣告する務めに栄光があるとすれば、まして、義とする務めはなお一層栄光に溢れるはずだからです。10 実際、かつて栄光を与えられたものも、この場合は、それよりはるかに勝った栄光のゆえに、栄光を与えられなかったも同然なのです⁵⁷。11 もしも消滅すべきものが栄光の中を通った⁵⁸とすれば、まして、永続するものはなおさら栄光に包まれているはずです。

12 このような希望を持っているので、わたしたちは甚だ大胆に振る舞っており⁵⁹、13 モーセのような真似はしません⁶⁰。彼は自分の顔に覆いをかけて、消滅すべきものの最期をイスラエルの子らがまともに見ることがないようにしました。14 むしろ、彼らの思いは頑なにされたのです。実際、今日に至るまで、古い契約が朗読されるときには同じ覆いが残ったままで、取り除かれずにいます。なぜなら、それはキリストにあっ

別訳の可能性は「新しい契約の奉仕者」。

⁵⁴ 「死に仕える務め」と訳したのは、*ἡ διακονία τοῦ θανάτου*。直訳は、「死の奉仕、死の務め」。

⁵⁵ 「モーセの顔の消滅すべき栄光のゆえに」と訳したのは、*διὰ τὴν δόξαν τοῦ προσώπου αὐτοῦ τὴν καταργουμένην. καταργουμένην* は、「消え去るべき、失われゆく」とも訳し得る。

⁵⁶ 出エジプト 34 : 30。

⁵⁷ 「栄光を与えられなかったも同然なのです」と訳したのは、*οὐ δεδόξασται*。「も同然な」は翻訳上の補い。

⁵⁸ 「栄光の中を通った」と訳したのは、*διὰ δόξης*。ニュアンスとしては、「栄光を通過した、通り過ぎた、一時的に栄光に包まれた」。

⁵⁹ 「甚だ大胆に振る舞っており」と訳したのは、*πολλὴ παρρησία χρώμεθα. χρώμεθα < χράομαι*、1人称複数。

⁶⁰ 「モーセのような真似はしません」と意識したのは、*οὐ καθάπερ Μωϋσῆς*。原文ではこの後に主動詞以下の文章が続くが³、訳文では一旦切つて、「彼は」を挿入して、以下を続けた。

て消滅するものだからです。15 しかし今日に至るまで、モーセの書⁶¹ が朗読されるときはいつでも、彼らの心には覆いがかかったままです。16 しかし、主の方に向き直れば、いつでも覆いは取り去られる⁶² のです。17 しかし、主は霊であり、主の霊のあるところには自由があります。18 わたしたちは皆、覆いを取り除かれた顔に主の栄光を鏡のように映しながら⁶³、主の霊によるかのように⁶⁴、栄光から栄光へと主と同じ姿に変えられていくのです。

〈土の器に納めた宝〉

4

1 こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けてこの務めをいただいているからには、怠けません⁶⁵。2 むしろ、わたしたちは、恥ずべき隠し事を捨て、狡猾に生活せず⁶⁶、神の言葉を曲げず、むしろ真理を明らかにすることによって、神の御前で人々のすべての良心⁶⁷ に対して自分を

⁶¹ 原文は単に「モーセ」。

⁶² 本節の原文は、*ήνίκα δὲ ἐὰν ἐπιστρέψῃ πρὸς κύριον, περιαιρείται τὸ κάλυμμα*。背景に LXX 出エジプト 34 : 34, *δ' ἂν εἰσεπορεύετο μωυσῆς ἐναντι κυρίου λαλεῖν αὐτῷ περιηροῖτο τὸ κάλυμμα ἕως τοῦ ἐκπορεύεσθαι*「モーセは主の前に行って主と語るときはいつも、出てくるまで覆いを外していた。」(秦剛平訳) が想定されている。

⁶³ 「覆いを取り除かれた顔に主の栄光を鏡のように映しながら」と訳したのは、*ἀνακεκαλυμμένῳ προσώπῳ τὴν δόξαν κυρίου κατοπτριζόμενοι*。拙訳は、ほぼ直訳。

⁶⁴ 「主の霊によるかのように」と訳したのは、*καθάπερ ἀπὸ κυρίου πνεύματος*。原文では文末にある。

⁶⁵ 「怠けません」と訳したのは、*οὐκ ἐγκακοῦμεν. ἐγκακέω* の最も基本的な意味「怠ける、怠惰になる、厭になる」。従来は、「気落ちする、落胆する、失望する」と訳されてきたが、田川も指摘するとおり、そう訳さなければならぬ根拠はない。少なくとも古典ギリシア語の語彙にはない。

⁶⁶ 「狡猾に生活せず」と訳したのは、*μὴ περιπατοῦντες ἐν πανουργίᾳ*。直訳は、「狡猾さにおいて歩まず」。περιπατέω には、「歩む」の転義として「生活する」も。

⁶⁷ 「良心」の別訳の可能性は「意識」。

推薦するのです。3 また、もしもわたしたちの福音が覆い隠されているとすれば、それは滅びる者たちの間で覆い隠されているのです。4 彼らの間では⁶⁸、この世の神が不信仰な者たちの思いを盲目にして、神の姿そのものである⁶⁹ キリストの栄光の福音が放つ光を⁷⁰ 見えないようにしたのです。5 実際、わたしたちが宣教しているのは、自分自身ではなく主なるイエス・キリストです。わたしたち自身はむしろ、イエスゆえにあなたがたに仕える僕なのです。6 なぜなら、神は「闇から光が輝き出よ」と命じられた方なので⁷¹、わたしたちの心の内に光を輝かせて⁷²、[イエス・]キリストの顔に神の栄光の知識が光を放つようにしてくださった⁷³からです。

7 しかし、この宝をわたしたちは土でできた器の中に⁷⁴ 持っています

⁶⁸ 「彼らの間では」と訳したのは、*ἐν οἷς*。少し前の *ἐν τοῖς ἀπολλυμένοις* を受ける。

⁶⁹ 「神の姿そのものである」と訳したのは、文末にある *ὅς ἐστιν εἰκὼν τοῦ θεοῦ*。「そのもの」は翻訳上の補い。付け加えた方が原文のニュアンスが伝わると判断した。

⁷⁰ 「キリストの栄光の福音が放つ光を」と訳したのは、*τὸν φωτισμὸν τοῦ εὐαγγελίου τῆς δόξης τοῦ Χριστοῦ*。*φῶς*ではなく*φωτισμὸν*である点を考慮して「…福音の光」ではなく「…福音が発する光」とした。

⁷¹ 「『闇から光が輝き出よ』と命じられた方なので」と訳したのは、*ὁ εἰπὼν ἐκ σκότους φῶς λάμψει*。

⁷² 「わたしたちの心の内に光を輝かせて」と訳したのは、*ὃς ἐλαμψεν ἐν ταῖς καρδίαις ἡμῶν*。

⁷³ 「[イエス・]キリストの顔に神の栄光の知識が光を放つようにしてくださった」と訳したのは、*πρὸς φωτισμὸν τῆς γνώσεως τῆς δόξης τοῦ θεοῦ ἐν προσώπῳ [Ἰησοῦ] Χριστοῦ*。

⁷⁴ 「土でできた器の中に」と訳したのは、*ἐν ὄστρακίνοις σκεύεσιν*。形容詞 *ὄστρακίνος* は通常「陶製の」であるが、「土でできた」と訳した。いわゆる *ὄστρακον*「陶片」に由来する形容詞である。パウロは、ダマスコ途上の出来事（召命の出来事）で神の栄光を示すキリストを啓示されたが、それをパウロはここで「宝」と呼んでいる。しかし、生身のパウロは当然他の人間と何ら異なるところのない脆弱な存在であった。それを直ぐ壊れてしまう脆い陶器に譬えたわけであるが、その背景には同時に、創造者である神が土の塵からお造りになった「土でできた器」としての人間の特徴がある。創世記2：7、参照。従来は、「土の器」と訳される場合が多かった。田川訳は「陶器」。

が、それは、この途方もない力⁷⁵が神のものであって、わたしたちから出たものではないということが分かるためです。8わたしたちは、あらゆる苦難に見舞われても窮せず⁷⁶、途方に暮れても絶望せず⁷⁷、9迫害されても見捨てられず、倒されても死なず、10いつもイエスの苦難の死を⁷⁸体にかけて歩き回っています⁷⁹。それは、イエスの命もまたわたしたちの体に現れるためです。11 実際、わたしたち生きている者は、イエスのゆえに常に死に引き渡されていますが、それは、イエスの命もまたわたしたちの死すべき肉に現れるためです。12 こうして、死がわたしたちの内働き、命があなたがたの内に働いています。13 しかし、わたしたちは、「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書かれているとおり、その同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それで、語っているのです。14 わたしたちは、主イエスを復活させた方がわた

⁷⁵ 「この途方もない力」と訳したのは、*ἡ ὑπερβολὴ τῆς δυνάμεως*。直訳は、「力の卓越性、力が卓越していること」。

⁷⁶ 「あらゆる苦難に見舞われても窮せず」と訳したのは、*ἐν παντί θλιβόμενοι ἀλλ' οὐ στενοχωρούμενοι*。11:23~27, 参照。*ἐν παντί θλιβόμενοι* という表現は7:5にも出る。前置詞句 *ἐν παντί* の意味については、「すべてにおいて」(青野訳)、「あらゆることで」(塚本訳)が直訳に近い。「あらゆる仕方」(田川訳)の可能性も。ただし、「四方から」(新共同訳)、「四方八方から」(フランシスコ会訳)は、新共同訳について田川も指摘するとおり、誤訳と言ってよい。むしろ、「あらゆる種類の」あたりが適訳か。

⁷⁷ 「途方に暮れても絶望せず」と訳したのは、*ἀπορούμενοι ἀλλ' οὐκ ἐξαπορούμενοι*。使われているのは *ἀπορέω* と同じ動詞に強調の *ἐκ* (*ἐξ*) をつけただけの *ἐξαπορέω* である。できれば、訳文にもそれを反映させたいところ。「困っても困り果ててしまわず」の方が原文に近い。

⁷⁸ 「イエスの苦難の死を」と訳したのは、*τὴν νέκρωσιν τοῦ Ἰησοῦ. νέκρωσις < νεκρώω < νεκρός*。パウロが、*θάνατος* ではなく *νέκρωσις* を使った理由は何であろうか。Liddell & Scott には、"mortification, death" と出ているので、「屈辱的な死、苦難の死」のニュアンスを推測することはできるのではないかと判断し、ひとまず「苦難の死」と訳しておいた。「殺害」(青野訳)の他は、単に「死」。田川も、先の理由は「わからない」としている。田川、432頁、当該注、参照。

⁷⁹ 「体にかけて歩き回っています」と訳したのは、*ἐν τῷ σώματι περιφέροντες*。

したちをもイエスと共に復活させ、あなたがたと共に御前に立たせてくださる、と知っているから⁸⁰です。15 実際、すべてのことはあなたがたのためですが、それは、恵みがより多くの人々をとおして増し加わり⁸¹、感謝を満ち溢れさせて、神の栄光に導き入れるため⁸²です。

〈信仰に生きる〉

16 だから、わたしたちは怠けません。むしろ、たとえわたしたちの外なる人は朽ち果てても、わたしたちの内なる人は日に日に新たにされていきます。17 実際、わたしたちの現在の軽い苦難は、溢れるばかりに、溢れるまでに⁸³、栄光という永遠の威厳をわたしたちにもたらしてくれるのです⁸⁴。18 わたしたちが目指しているのは見えるものではなく、見えないものです。実際、見えるものは一時的ですが、見えないものは永遠なのです。

⁸⁰ 「わたしたちは……知っているからです」と訳したのは、この節の冒頭にある分詞 *εἰδότες*。

⁸¹ 「恵みがより多くの人々をとおして増し加わり」と訳したのは、*ἡ χάρις πλεονάσασα διὰ τῶν πλειόνων. πλεονάσασα < πλεονάζω, 1 aor. 女性分詞, 主格*。

⁸² 「感謝を満ち溢れさせて、神の栄光に導き入れるため」と訳したのは、*τὴν εὐχαριστίαν περισσεύση εἰς τὴν δόξαν τοῦ θεοῦ. περισσεύση < περισσεύω, 1 aor. 接続法 (ἵνα) によって導かれる句の主動詞, 3 人称単数*。主語は *ἵνα* に続く *ἡ χάρις* 「恵み」。文脈から判断する限り、「恵みが神の栄光に導き入れる」対象は、「あなたがた」であろう。

⁸³ 「溢れるばかりに、溢れるまでに」と訳したのは、*καθ' ὑπερβολὴν εἰς ὑπερβολὴν*。ギリシア語原文がほとんど同語反復、あるいは冗語なのだから、訳文もそれに倣って訳した。*καθ' ὑπερβολὴν εἰς ὑπερβολὴν* というこの句をどう訳すか、つまり、副詞的に動詞 *κατεργάζεται* にかけるか、形容詞的に *αἰώνιον βάρος δόξης* にかけるかで解釈が分かれる。拙訳は、前者の解釈。同じく副詞的に解する田川訳は、「満ちあふれるばかりに圧倒的に」として同語反復的な感じを避けているし、青野訳は、「卓越した仕方です」と訳して済ませていて、パウロの表現に見られるくどさは無くなってしまふ。

⁸⁴ 「栄光という永遠の威厳をわたしたちにもたらしてくれる」と訳したのは、*αἰώνιον βάρος δόξης κατεργάζεται ἡμῖν*。

5

1 実際、わたしたちは知っています、たとえ、わたしたちの地上の天幕の家が壊れても、神が用意された建物を⁸⁵わたしたちは持っているということを。それは、手で造ったのではない、天にある永遠の家です。2 実のところ⁸⁶、わたしたちはこの地上の天幕の中で呻きながら、わたしたちのその天来の住まいを⁸⁷上に着たいと切望しているのです。3 としてもし本当に地上の天幕を脱いだとしても⁸⁸、わたしたちは裸でいるわけではありません⁸⁹。4 確かに、わたしたちはこの天幕の中であって重荷を負って呻いていますが、それは脱ぎたいと願うからではなく、むしろその上に着たいと願うからです。上に着た暁には⁹⁰、死すべきものが命に呑み込まれてしまうのです。5 わたしたちに他ならぬそのことを可能にしてくださったのは⁹¹神で、神はわたしたちに霊という手付金を与えてくださった⁹²のです。

⁸⁵ 「神が用意された建物を」と訳したのは、*οικοδομὴν ἐκ θεοῦ*。この場合の前置詞 *ἐκ* は、いわゆる「行為者」を表すもの。拙訳はフランシスコ会訳に同じ。他に「神が建てられた」(塚本訳)。

⁸⁶ 「実のところ」と訳したのは、*καὶ γὰρ*。

⁸⁷ 「わたしたちのその天来の住まいを」と訳したのは、*τὸ οἰκητήριον ἡμῶν τὸ ἐξ οὐρανοῦ*。

⁸⁸ 「としてもし本当に…としても」と訳したのは、*εἰ γε καὶ*。なお、「脱いだ」と訳した分詞 *ἐκδυσάμενοι* には、以前の版で本文に採用されていた *ἐνδυσάμενοι* という異読があり、その方が写本としては多数派である。もし、この読みを採用すれば、「もしそれを着れば」となり、この場合、「それ」は「天来の住まい」を指すことになる。拙訳では、ひとまず、B. M. Metzger, *A Textual Commentary on the Greek New Testament*, Deutsche Bibelgesellschaft, 1994², p. 511 の判断に従って、底本の読みを採用した。

⁸⁹ 「わたしたちは裸でいるわけではありません」と訳したのは、*οὐ γυμνοὶ εὐρεθισόμεθα*。

⁹⁰ 「上に着た暁には」と意識したのは、結果を表すものと解した接続詞 *ὡς* …。

⁹¹ 「わたしたちに他ならぬそのことを可能にしてくださったのは」と訳したのは、*ὁ δὲ κατεργασάμενος ἡμᾶς εἰς αὐτὸ τοῦτο*。

⁹² 「神はわたしたちに霊という手付金を与えてくださった」と訳したのは、*ὁ*

6 それで、わたしたちはいつも安心しており⁹³、しかも、この体の中に住んでいる限り、主から離れて寄留する身である⁹⁴ ことを知っているの⁹⁵、7 実際、わたしたちは信仰を頼りに歩いていて、目に見える姿を頼りにしていないので⁹⁶、8 わたしたちは安心しており、しかも、むしろこの体から外に出て住む方が⁹⁷、つまり主のもとに住む方が⁹⁸ よいと思っています。9 だから、体の中に住もうと、その外に住もうと⁹⁹、主に喜ばれる者になることこそ、わたしたちの名誉なのです¹⁰⁰。10 実際、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前で露わにされて¹⁰¹、それぞれが、自

δους ἡμῖν τὸν ἀρραβώνα τοῦ πνεύματος。 1:22, 参照。 *ὁ … δους τὸν ἀρραβώνα τοῦ πνεύματος ἐν ταῖς καρδίαις ἡμῶν*。見て分かるのとおり、われわれの箇所 *ἡμῖν* の代わりに末尾に *ἐν ταῖς καρδίαις ἡμῶν* が入っているだけ。

⁹³ 「それで、わたしたちはいつも安心しており」と訳したのは、*Θαρροῦντες οὖν πάντοτε*。 *θαρρέω* < *θαρσέω* 「恐れなく、心強い、安心している、勇気がある」。分詞、男性複数、主格。

⁹⁴ 「主から離れて寄留する身である」と訳したのは、*ἐκδημούμεν ἀπὸ τοῦ κυρίου*。 *ἐκδημέω* 「国を離れて異国（異郷・外国）に暮らす、旅に出る、国を離れて寄留者として暮らす」。

⁹⁵ 「…ことを知っているの」と訳したのは、*εἰδότες ὅτι*…。

⁹⁶ この7節は、挿入句。なお「目に見える姿」と訳したのは *εἶδος* < *εἶδος*、属格。

⁹⁷ 「むしろこの体から外に出て住む方が」と訳したのは、*μᾶλλον ἐκδημήσαι ἐκ τοῦ σώματος*。

⁹⁸ 「つまり、主のもとに住む方が」と訳したのは、*καὶ ἐνδημήσαι πρὸς τὸν κύριον*。

⁹⁹ 「体の中に住もうと、その外に住もうと」と訳したのは、*εἴτε ἐνδημοῦντες εἴτε ἐκδημοῦντες*。

¹⁰⁰ 「主に喜ばれる者になることこそ、わたしたちの名誉なのです」と訳したのは、*φιλοτιμούμεθα, …, εὐάρεστοι αὐτῷ εἶναι*。

¹⁰¹ 「キリストの裁きの座の前で露わにされて」と訳したのは、*φανερωθῆναι δεῖ ἐμπροσθεν τοῦ βήματος τοῦ Χριστοῦ*。ただし、二つ目の *δεῖ* 「…なければならぬ」は、その前の不定詞 *φανερωθῆναι* だけでなく、ここの *τοῦ Χριστοῦ* の後にコンマを間に挟んで続く *ἵνα* で導かれる文章の中の不定詞 *κομίσσεται* にもかかるので、訳文では最後に置かざるを得ない。なお、*φανερωθῆναι* は「露わにされて」と訳したが、別訳の可能性は「出頭し、出廷し」とも訳し得る「姿を現し」。ただし、この動詞の受動相は可能な限り、

ら体を介して行なったことに応じて、善きにつけ悪しきにつけ、その報いを受けなければならないのです。

〈和解させる任務〉

11 ところで、わたしたちは主に對する畏れを¹⁰²知っているのです、人々を説得していますが、神に對しては既にわたしたちは露わにされています¹⁰³。しかし、わたしはあなたがたの意識の中でも既にわたしたちが露わにされていることを¹⁰⁴望んでいます。12 わたしたちは、あなたがたにまた自己推薦しているわけではなく、むしろ、あなたがたにわたしたちのことを誇る機会を与えようとしているのです。そうすれば、上辺を誇って心を誇らない者たちに対処できる¹⁰⁵からです。13 もしもわたしたちが正気を失ったとすれば、神に對してであり¹⁰⁶、正気であるとすれば、あなたがたに對してです。14 実際、キリストの愛がわたしたちを捕えて離さないのです、わたしたちはこう判断します。すなわち、一人の方がすべての者のために死んだのであれば¹⁰⁷、すべての者が死んだのであり、15 その方がすべての者のために死んだのは、生きている者たちがもはや自分自身のために生きるのではなく、むしろ、自分たちのために死んで復活したその方のために生きるためなのだ、と。

16 だから、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知るつもりはありません。たとえ、わたしたちがかつて肉に従ってキリストを知っていた

同じ訳語に統一してある。

¹⁰² 「主に對する畏れを」と訳したのは、*τὸν φόβον τοῦ κυρίου*。直訳は、「主の畏れ」。

¹⁰³ 「既にわたしたちは露わにされています」と訳したのは、*πεφανερῶμεθα*。

¹⁰⁴ 「既に…露わにされていることを」と訳したのは、*πεφανερῶσθαι*。

¹⁰⁵ 「そうすれば、上辺を誇って心を誇らない者たちに対処できる」と訳したのは、*ἵνα ἔχητε πρὸς τοὺς ἐν προσώπῳ καυχωμένους καὶ μὴ ἐν καρδίᾳ ἔχητε πρὸς τοὺς…*を「…者たちに対処できる」と意識した。「上辺」の別訳は「外面（そとづら）、表面」。

¹⁰⁶ ダマスコ途上の出来事（パウロの召命体験）を「正気を失った」もの、ただの幻覚を見たに過ぎない信用できないものとする批判に對する、神を持ち出してする反論。

¹⁰⁷ 「のであれば」と訳したのは、不変化詞 *ἄρα*。

としても、むしろ今はもうそのように知るつもりはありません¹⁰⁸。17だから、もしもだれかがキリストにあるならば、その人は新しい被造物¹⁰⁹です。古いものは過ぎ去った、見よ、新しいものが生じた。18しかし、すべては神から生じており、神はキリストをとおしてわたしたちを御自分と和解させ、わたしたちに和解の務めを¹¹⁰ お与えになりました。19つまり、神はキリストにあって世を御自分と和解させ、人々の過ちを数え上げることをせず¹¹¹、わたしたちに和解の言葉を託されたわけです¹¹²。20そこで、キリストに代わって、わたしたちは神がわたしたちをとおして勤めておられるがままに、使者として働いているのです。そのわたしたちがキリストに代わってお願いする。神と和解しなさい。21罪を知らなかった方を、神はわたしたちのために罪となさいました。それは、わたしたちがその方にある神の義となるためです。

6

1さて、神と共に働く者として、わたしたちはまた勧めます。あなたがたが無駄に神の恵みを受けたことにならないように。2実際、神は言っておられる。

¹⁰⁸ 「むしろ今はもうそのように知るつもりはありません」と訳したのは、*ἀλλὰ νῦν οὐκέτι γινώσκουμεν*。なお、この節の初めの方に出る「わたしたちは、今後だれをも肉に従って知るつもりはありません」は、*ἡμεῖς ἀπὸ τοῦ νῦν οὐδένα οἶδαμεν κατὰ σάρκα* で、動詞は *οἶδαμεν* と異なるが、訳し分けていない。

¹⁰⁹ 「新しい被造物」と訳したのは、*καινὴ κτίσις* で直訳。「新しく創造された者」（新共同訳）。拙訳は、田川訳に同じ。別訳の可能性は「新しい創造」。

¹¹⁰ 「和解の務めを」と訳したのは、*τὴν διακονίαν τῆς καταλλαγῆς* で直訳。分かり易く補って訳すと、「和解のために仕える務め」。「和解のための奉仕職」も可能ではある。

¹¹¹ 「人々の過ちを数え上げることをせず」と訳したのは、*μὴ λογιζόμενος αὐτοῖς τὰ παραπτώματα αὐτῶν*。なお、*αὐτοῖς … αὐτῶν* という冗語的言い回しはギリシア語ではごく普通。

¹¹² 「つまり……わけです」と訳したのは、本節の冒頭にある *ὡς ὅτι*。本節は、前節の内容の敷衍もしくは言い直し。

「然るべき時に、わたしはあなたに耳を傾け、

救いの日に、わたしはあなたを助けた」¹¹³ と。

見よ、今こそまたとない時¹¹⁴、見よ、今こそ救いの日。3 わたしたちは、だれに対しても決して躓きの機会を与えないようにしていますが、それはこの務めが非難されないためです。4 むしろ、わたしたちはあらゆることで¹¹⁵ 自分自身を神に仕える者として推薦しています。すなわち、大いなる忍耐で、苦難で、困窮で、行き詰まりで、5 鞭打ちで、監禁で、騒乱で、労苦で、不眠で、空腹で、6 純真さで、知識で、寛容さで、善良さで、聖霊で、偽りのない愛で、7 真理の言葉で、神の力で、また¹¹⁶、左右の手の¹¹⁷ 義の武器によって、8 栄光と恥辱によって、不評と好評によってそうしているのです。わたしたちは、騙す者のようで、誠実であり¹¹⁸、9 知られていない者のようで、よく知られており、死に行く者のようで、しかし見よ、わたしたちは命をいただいています¹¹⁹。

¹¹³ 引用は、*καιρῷ δεκτῷ ἐπήκουσά σου καὶ ἐν ἡμέρᾳ σωτηρίας ἐβοήθησά σοι*。LXX イザヤ 49:8 の一部。パウロによる動詞の入れ替え等は一切ない。ただし、マソラではないので、*καιρῷ δεκτῷ* は「恵みの時に」ではなく、そのまま「然るべき時に」と訳してある。田川訳、青野訳は、「ふさわしい時」。田川、455 頁、当該注、参照。

¹¹⁴ 「またとない時」と訳したのは、*καιρὸς εὐπρόσδεκτος*。先の LXX イザヤの単語 *καιρὸς δεκτός* の形容詞を同語根の別の単語に入れ替えたもの。< *εὐ+πρὸς+δέχομαι*。直訳的には、「神に受け入れられるよい（絶好の、またとない）時」。別訳の可能性は「絶好の時」（青野訳）。かなり普及したように思われる「今や、恵みの時」という訳語は残念ながら適訳ではない。

¹¹⁵ 「あらゆることで」と訳したのは、*ἐν παντί*。次に続く *συνιστάντες ἑαυτοὺς ὡς θεοῦ διάκονοι* 「わたしたちは、自分自身を神に仕える者として推薦しています」の後に、それが同じ *ἐν+* 与格の形で列挙されている。パウロとしては、*ἐν παντί* の *παντί* の代わりに種々の単語を挙げているだけなので、翻訳に当たっては、*ἐν* は「あらゆることで」の「で」を添えて単語を列挙する形式をとった。

¹¹⁶ 「また」は翻訳上の補い。挿入した根拠は、ここから前置詞が *ἐν* から *διὰ* に替わっているため。

¹¹⁷ 「手の」は翻訳上の補い。むしろ「左右に携えた義の武器」の方がよいかもしれない。

¹¹⁸ 「騙す者のようで、誠実であり」と訳したのは、*ὡς πλάνοι καὶ ἀληθεῖς*。「ペテン師のようで、…」とも訳せる。

懲罰を受けている者のようで、殺されてはおらず¹²⁰、10 苦しんでいる者のようで、しかし常に喜んでおり、貧しい者のようで、しかし多くの人を豊かにしており、何も持っていない者のようで、何でも所有しています。

11 コリントの人々よ、わたしたちはあなたがたに向かって率直に話しました¹²¹し、わたしたちの心は広く開いています。12 あなたがたは、わたしたちのところでは行き詰まっていません¹²²。あなたがたの腹の中で¹²³行き詰まっているのです。13 子どもを相手にするようにわたしは言いますが、お返しとして同じように、あなたがたも心を広く開きなさい¹²⁴。

〈生ける神の神殿〉

14 あなたがたは、信仰のない者たちと一緒に釣合いのとれない軛を負う者となってはなりません。実際、義と不法とにどんな共通点があるのか。あるいは、光には闇との間に¹²⁵どんな交わりがあるのか。15 また、

¹¹⁹ 「しかし見よ、わたしたちは命をいただいています」と意識したのは、 *καὶ ἰδοὺ ζῶμεν*。直訳は「見よ、わたしたちは生きている」。他は動詞が分詞だが、ここは定動詞、現在、1人称複数。永遠の命を神からいただいている、という意味か。田川、458頁、「死ぬものとして」に関する注、参照。

¹²⁰ 「懲罰を受けているようで、殺されてはおらず」と訳したのは、 *ὡς παιδευόμενοι καὶ μὴ θανατούμενοι*

¹²¹ 「わたしたちはあなたがたに向かって率直に話しました」と意識したのは、 *Τὸ στόμα ἡμῶν ἀνέφωγεν πρὸς ὑμᾶς*。直訳は、「わたしたちの口はあなたがたに向かって開いている」。*ἀνέφωγεν* < *ἀνοίγω*, 2 現在完了, 3 人称単数。

¹²² 「あなたがたは、わたしたちのところでは行き詰まっていません」と訳したのは、 *οὐ στενοχωρεῖσθε ἐν ἡμῖν*。先に、「あらゆること」の具体的な列挙の中で、4 節の最後に *ἐν στενοχωρίαις* が出ていた。そこでの訳語が「行き詰まり」。

¹²³ 「あなたがたの腹の中で」と訳したのは、 *ἐν τοῖς σπλάγγνοις ὑμῶν*。

¹²⁴ 「あなたがたも心を広く開きなさい」と意識したのは、 *πλατύνθητε καὶ ὑμεῖς*。「心を」は翻訳上の補い。11 節の *ἡ καρδία ἡμῶν πεπλάτνται* を受けた発言であることから、補った。

¹²⁵ 「闇との間に」と訳したのは、 *πρὸς σκότος. κοινωνία* < *κοινωνέω* との

キリストにはベリアルとの間にどんな調和があるのか。あるいは、信仰のある者には信仰のない者と一緒に与るどんな分け前があるのか。16 神の住まいには偶像とどんな一致があるのか。実際、わたしたちは生ける神の住まいなのです。それは、神がこう言っておられるとおりです。

「『わたしは彼らの間に住み、巡り歩こう。

わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる¹²⁶。

17 だから、おまえたちは彼らの中から出て行き、

彼らから離れよ¹²⁷』と主は言われる。

また、汚れたものに触れるな¹²⁸。

そうすれば、わたしはおまえたちを受け入れ¹²⁹、

18 おまえたちの父となり、

おまえたちはわたしの息子¹³⁰、娘となろう。』

関係で、「に対して、に対する」ではなく、「との間に」と訳すことにした。

¹²⁶ 「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」は、エゼキエル 37：27。なお、LXX レビ 26：11a, 12 は、「^{11a}わたしはおまえたちのうちにわが契約を置き、… ¹²わたしはおまえたちの中を巡り歩こう。わたしはおまえたちの神となり、おまえたちはわたしの民となる」となっており、「おまえたち」を「彼ら」に入れ替えると、12 節はエゼキエルと一致する。秦剛平訳では、上に「契約」と訳した単語 *τὴν διαθήκην* が「幕屋」と訳されており、「わたしは彼らの間に住み」との意味上の関連が残ることになる。マソラに基づく新共同訳の 11a は、「わたしはあなたたちのただ中にわたしの住まいを置き」。

¹²⁷ 「おまえたちは彼らの中から出て行き、彼らから離れよ」は、LXX イザヤ 52：11, *ἐξέλθατε ἐκ μέσου αὐτῆς ἀφορίσθητε* 「おまえたちはその中から出て行き、そこを離れよ」（「その、そこ」はシオン）。

¹²⁸ 「汚れたものに触れるな」は、LXX イザヤ 52：11 の前の注に示した引用文の直前にそのままの文章 *καὶ ἀκαθάρτον μὴ ἄπτεσθε* が出る。

¹²⁹ 「わたしはおまえたちを受け入れ」は、LXX エゼキエル 20：34, … *καὶ εἰσδέξομαι ὑμᾶς ἐκ τῶν χωρῶν, οὐ διεσκορπίσθητε ἐν αὐταῖς* 「わたしはおまえたちが散らされた国々からおまえたちを受け入れる」。

¹³⁰ 「(わたしは) おまえたちの父となり、おまえたちはわたしの息子(となろう)」は、LXX サムエル下 (ΒΑΣΙΛΕΙΩΝ Β') 7：14, *ἐγὼ ἔσομαι αὐτῷ εἰς πατέρα, καὶ αὐτὸς ἔσται μοι εἰς υἱόν* 「わたしは彼の父となり、彼はわたしの息子となる」。「彼」が「おまえたち」に、それに伴って後半の動詞の人称と数が変わり、「息子」が複数に変わっている。かなり自由な引用。

と全能の主は言われる¹³¹」と。

7

1 だから、愛する者たちよ、わたしたちはこのような約束をいただいているのですから、肉と霊を汚すあらゆることから自分を清めて¹³²、神に対する畏れのうちに聖性を完成しようではありませんか。

〈教会の悔い改めを喜ぶ〉

2 広い気持ちでわたしたちを受け入れなさい¹³³。わたしたちはだれにも損害を与えず、だれをも破滅させず、だれからも暴利を貪ったことがありません¹³⁴。3 有罪宣告するために言うものではありません。実際、前にも言ったことですが、あなたがたはわたしたちの心の内にいて、共に死に共に生きる者となっている¹³⁵のです。4 わたしにはあなたがたに對

¹³¹ 「全能の主は言われる」は、やはり LXX サムエル下 7:8 に、文脈は異なるが、そのままの形 *λέγει κύριος παντοκράτωρ* が出る。

¹³² 「肉と霊を汚すあらゆることから自分を清めて」と訳したのは、*καθαρίσωμεν ἑαυτοὺς ἀπὸ παντός μολυσμοῦ σαρκὸς καὶ πνεύματος*。 *καθαρίσωμεν ἑαυτοὺς* はむしろ「自分を清めようではありませんか」であるが、コンマを挟んですぐ次に出てくる分詞 *ἐπιτελοῦντες* に続けるために、あたかも分詞のように訳し、本体の分詞の方を「完成しようではありませんか」と aor. の接続法、1 人称複数であるかのように訳した。

¹³³ 「広い気持ちで私たちを受け入れなさい」と訳したのは、*Χωρήσατε ἡμᾶς*。 *χωρέω* 「余地を作る、受け入れる」の語源 *χώρος* 「場所、余地」のニュアンスを考慮すれば、「広い気持ちで」を補った方がよいと判断した。

¹³⁴ 「だれからも暴利をむさぼったことはありません」と訳したのは、*οὐδένα ἐπλεονεκτήσαμεν*。 *πλεονεκτέω*, “*have or claim more than one’s due*, mostly in bad sense, later c. acc. pers., *get or have the advantage over*,” Liddell & Scott. 別訳の可能性は「だれからも不当に利益を上げたことはありません、だれからも不当に儲けたことはありません」。

¹³⁵ 「あなたがたは……共に死に共に生きる者となっている」と訳したのは、*ἐστε εἰς τὸ συναποθανεῖν καὶ συζῆν*。田川も指摘するとおり、背景には洗礼という事態が想定されるはずである。ローマ 6:8, *εἰ δὲ ἀπεθάνομεν σὺν Χριστῷ, πιστεύομεν ὅτι καὶ συζήσομεν αὐτῷ* 「しかし、もしわたしたちがキリストと共に死んだとすれば、わたしたちは彼と共に生きることに

する大いなる率直さがあり、わたしにはあなたがたに関する大いなる誇りがあります¹³⁶。わたしは慰めに満たされており、わたしたちがどんな苦難に遭ったときでも¹³⁷ 喜びに満ち溢れています。

5そして実際¹³⁸、わたしたちがマケドニアに着いたとき、わたしたちの肉体は全く休まることなく¹³⁹、あらゆる苦難に見舞われていました¹⁴⁰。外には戦いが、内には恐れがありました。6ところが、貶められた者¹⁴¹を慰めてくださる方、すなわち神は、テトスの到着によってわたしたちを慰めてくださいました。7しかし、それは彼の到着によるだけでなく、彼があなたがたについて慰められたその慰めによるものでも¹⁴²ありました。彼がわたしたちに、あなたがたの思慕の情¹⁴³、あなたがたの悲嘆、わたしに対するあなたがたの熱心を伝えてくれたので、その結

もなるだろうと信じています」。田川、461～462頁、当該注、参照。

¹³⁶ 「わたしにはあなたがたに対する大いなる率直さがあり」と訳したのは、*πολλή μοι παρρησία πρὸς ὑμᾶς*。「わたしにはあなたがたに関する大いなる誇りがあります」と訳したのは、*πολλή μοι καύχησις ὑπὲρ ὑμῶν*。*παρρησία* は、「何でも率直に語る、開けっぴろげに自由に語る」こと。「確信」(青野訳)、「信頼」(新共同訳)はむしろ誤訳の部類。

¹³⁷ 「わたしたちがどんな苦難に遭ったときでも」と訳したのは、*ἐπὶ πάσῃ τῇ θλίψει ἡμῶν*。もっと直訳的に訳せば、「わたしたちのどんな苦難に際しても」。まあ、「翻訳」としては拙訳くらいがよかろう。

¹³⁸ 「そして実際」と訳したのは、*Καὶ γάρ*。ここからは、内容的には7:4に続くのではなく、2:13に続く。

¹³⁹ 「わたしたちの肉体は全く休まることなく」と訳したのは、*οὐδεμίαν εἴσηκεν ἀνεσιν ἢ σὰρξ ἡμῶν*。

¹⁴⁰ 「あらゆる苦難に見舞われていました」と訳したのは、*ἐν παντὶ θλιβόμενοι*。同じ表現が4:8にも出る。むしろ、「あらゆる種類の苦難…」が適訳か。

¹⁴¹ 「貶められた者」と訳したのは、*τοὺς ταπεινοὺς*。別訳は「卑しめられた者」。「気落ちした者」(新共同訳)、「低き者」(田川訳)、「あわれな者」(塚本訳)。

¹⁴² 「彼があなたがたについて慰められたその慰めによるものでも」と訳したのは、*ἀλλὰ καὶ ἐν τῇ παρακλήσει ἢ παρεκλήθη ἐφ' ὑμῖν*。テトスを慰めたのは、飽くまでも「神」であって「あなたがた」ではない。つまり、テトスは、到着に際して、神による慰めを携えていたというわけである。

¹⁴³ 「あなたがたの思慕の情」と訳したのは、*τὴν ὑμῶν ἐπιπόθησιν*。

果¹⁴⁴、わたしは一層喜んだのです。

8 というのは、もしもあの手紙であなたがたを苦しませたとしても、わたしは後悔しません。もしも後悔したとしても、こう言うのは¹⁴⁵、[実際] あの手紙が一時的とは言えあなたがたを苦しませたことを知っているからですが、9 今は喜んでいます。それは、あなたがたが苦しんだからではなく、苦しんだ結果あなたがたが悔い改めた¹⁴⁶ からです。実際、あなたがたが苦しんだのは神の御旨による¹⁴⁷ ことなので、あなたがたはわたしたちから一切損失を被ってはいません。10 神の御旨による苦痛は、後悔の必要がない救いに導く悔い改めをもたらし、他方、この世の苦痛は死をもたらします。11 見よ、神の御旨によって苦しむというまさにこのことが、あなたがたにどれほどの熱意をもたらしたのか。さらにまた¹⁴⁸ 弁明を、また憤りを、また怖れを、また思慕を、また熱心を、また処罰をもたらしたのか。あの事件に関しては、あなたがたは、あらゆる点で潔白な者として自分を推薦しました¹⁴⁹。12 したがって、もしもわたしがあなたがたに書いたとしても、それは損害を与えた者のためでもなければ、損害を被った者のためでもなく、むしろ、わたしたちに対するあなたがたの熱意が神の御前であなたがたに対して露わにされるためだったのです。13 それで、わたしたちは慰められたというわけです。

わたしたちのこの慰めに加えて、なお一層わたしたちが喜んだことがあります¹⁵⁰。それはテトスの喜びで、彼の霊があなたがた全員¹⁵¹ によつ

¹⁴⁴ 「その結果」と訳したのは、ὥστε。ὥστε に導かれる文章の動詞は不定詞となるので、χαρῆναι 「喜んだのです」。

¹⁴⁵ 「こう言うのは」はつながりをスムーズにするための翻訳上の補い。

¹⁴⁶ 「苦しんだ結果あなたがたが悔い改めた」と訳したのは、ἐλυπήθητε εἰς μετάνοιαν。

¹⁴⁷ κατὰ θεόν。10 節の「神の御旨による」、11 節の「神の御旨によって」も同じ。

¹⁴⁸ 「さらにまた…、また…、また…」と訳したのは、すべて列挙の際の ἀλλά。

¹⁴⁹ 「あなたがたは、あらゆる点で潔白な者として自分を推薦しました」と訳したのは、ἐν παντί συνεισηγάτε ἑαυτοὺς ἀγνοῦς εἶναι。「自己推薦、自分を推薦する」については、3：1，4：2，6：4，参照。

て安らぎを与えられたというのです¹⁵²。14 彼にあなたがたのことを少し誇ったのに、わたしは恥をかかずに済んだばかりでなく、わたしたちがあなたがたに語ったことがすべて真実であった¹⁵³ ように、テトスの前でわたしたちが誇ったこともまた真実となったのです。15 そして、彼の気持ちは一層強くあなたがたの方に向いています。それは、彼があなたがた全員の従順さを、すなわち、どんなに畏れとおののきをもってあなたがたが自分を迎えてくれたかを、思い出しているから¹⁵⁴ です。16 わたしは、あなたがたについてあらゆる点で安心していられることを喜んでいきます¹⁵⁵。

¹⁵⁰ 「わたしたちのこの慰めの他に、わたしたちがなお一層喜んだことがあります」と訳したのは、*Ἐπί δὲ τῇ παρακλήσει ἡμῶν περισσοτέρως μᾶλλον ἐχάρημεν*。原文はここで切れてはいないが、翻訳の便宜上、一旦、切つてある。

¹⁵¹ 「あなたがた全員によって」と訳したのは、*ἀπὸ πάντων ὑμῶν*。別訳は「一同」（新共同訳）。15 節の「あなたがた全員の」も同様。2:3 (2回), 5にも出る。

¹⁵² 「それはテトスの喜びで、彼の霊があなたがた一同によって安らぎを与えられたというのです」と訳したのは、*ἐπὶ τῇ χαρᾷ Τίτου, ὅτι ἀναπέπνυται τὸ πνεῦμα αὐτοῦ ἀπὸ πάντων ὑμῶν. ὅτι* で導かれる文章を「テトスの喜び」の内容を説明するものと解し、書かれた順番を生かして訳し降ろすべく、このように意識した。

¹⁵³ 「わたしたちがあなたがたに語ったことがすべて真実であった」と訳したのは、*πάντα ἐν ἀληθείᾳ ἐλαλήσαμεν ὑμῖν*。直訳は、「わたしたちはあなたがたにすべて真実を語った」。若干意訳した。

¹⁵⁴ 「思い出しているからです」と訳したのは、*ἀναμνησκομένον*。分詞のいわゆる独立的用法, *genitivus absolutus*。

¹⁵⁵ 「わたしは、あなたがたについてあらゆる点で安心していられることを喜んでいきます」と訳したのは、*χαίρω ὅτι ἐν παντί θαρρῶ ἐν ὑμῖν*。本当は安心などしていないのに、あなたがたについては不安材料など一つもないのは喜ばしい限りだと言って、これ以上心配をかけないで喜ばしてほしいものだ、という言わば脅し文句である。